

前川喜平さん語る

写真は前川喜平さん、寺脇研さんによる「ちくま新書」の新刊。表紙カバー裏から一人ひとりの生きる力をサポートするのが教育の使命。その思いのもと、どんな人でも、いつでもどこでも学べるよう改革を進めてきた二人の文部官僚。復古的なナショナリズムと、弱肉強食を放置する市場主義が勢いを増すなかで、加計学園の問題は起きた。この問題を再検証し、生涯学習やゆとり教育、高校無償化、夜間中学など一連の改革をめぐって、とことん語り合う。これからの日本、これからの教育を展望する希望の書である。



9月に「障害児の高校進学を実現する全国交流集会」が、愛知で開催される。この集会の準備にすこしだけ参加してきたので、本書に注目した。本書のなかで、集会に関係する前川さんの言葉を抜き出してみたい。

高校無償化というのは、15歳から18歳までの、すべての若者に学習機会を保障しますよという、学習権保障の思想なんですね。

「無償で学ぶ権利があります」と言うからには、入学を希望するすべての若者が学校に行けるようにならないと、おかしい。つまり、論理必然的に、希望者全入が実現しなければならないわけです。

その先には、義務教育化という課題が控えています。もちろん、子どもが学校に行きたくなければ不登校でも全然かまわないわけですが、それでも、何らかの場所で学べるよう、多様な学習の場を大人が用意し、そうした場で子どもが学ぶ。親はそれを妨げたりせず、サポートしていく。それができるようにすることが大事です。

ですから私は、無償化の先には希望者全入、さらには義務教育化というステップがあるはずだと思っているんですね。

だれもが18歳になるまで、学ぶ場が必ず確保されているという状態を作らなきゃいけないわけです。でなければ、授業料の心配をせず、誰でも高校に行けますという制度を作った意味がない。その子にふさわしい学びの場が、必ずどこかになきゃいけない。それが、一つの課題だと思うんですね。

ようやく高校無償化は実現しましたが、そもそも戦後の学制改革では、教育を受けたいと思うすべての人に門戸を広げるという基本理念があって、そのための方策として「高校三原則」（小学区制、総合制、男女共学）が掲げられていたわけですね。

義務教育まで行ってはいませんでした。もともと、希望者全入という考えがあったんです。ところが昭和30年代後半あたりから、文部省の考え方が、適格者主義に変わっていきました。

適格者主義というのは、一定の学力のある者しか高校に入れたいとする考え方で、当時の状況をかながみれば、仕方のない部分もあったかもしれません。というのも、当時は高校の数が限られていたため、入学定員を超える応募者数になってくると、選抜試験によって、ふるい落とさざるを得なくなったんですね。ところがその後、高校進学率は高まる一方で、いまや98%まで来ています。

逆説的ですが、マイノリティはマジョリティであるという結論に至ったわけです。つまり、大多数の人はなんらかの意味でマイノリティに属していると考えていいと思うんですね。

一人ひとりが違う存在なんですね、だから、いろんなタイプのマイノリティがいるということを、自覚しないとイケない。

とくに学校という場所には、あらゆる人が学びに来るわけですから、学校や教師は、そのことを知っておかなければいけない。文部科学省も、そのことをきちんと知っておく必要がある。一人ひとりの、その人らしさが活かせるようにしてあげなければいけないわけですから。

教師たるもの、どんなマイノリティが自分の教室にいるのか、つねに気を配らなくてはイケない。これはものすごく大事だと思うんですね。

いろんな大人と接する中で、子どもたちが成長していく。『みんなの学校』というドキュメンタリーでは、その成長の過程が浮かび上がってくるんですね。

大人はどうせ自分の言うことを理解してくれないと思い込んでいる子どもが、そうじゃないということに少しずつ気づいていき、それでもつい反抗して暴れてしまった後、反省して謝りにいくといった、いいシーンがいくつもあるんですよ。

徹底して一人ひとりを大切にするという考え方でこの学校は運営されていて、本当にそれが徹底しているんです。

子どもたちに守ってもらうルールは、一つだけ。「自分がされて嫌なことは人にしない、言わない」これだけです。

なかには ADHD や自閉症など発達障害のある子もいるし、転校前の学校で不登校だった子や乱暴者で学校の手には負えなかった子など、いろんな子がいるわけです。その一人ひとりと、しっかりと向き合っている姿が、このドキュメンタリーに映し出されています。

本当に究極のインクルーシブなんですよ。それが成り立つということを実証している学校なんです。

(2018年3月17日)